

# 北東アジア地域における国際理解教育実践

——「Kids'Asian Union Camp」の質的研究——

村 上 忠 明

## 1. はじめに

### (1) 持続可能な国際社会構築への潮流

2014年11月10日～12日、愛知県において「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議<sup>1</sup>」が開催された。2005年からスタートした「ESDの10年」が今年で最終年を迎えるため各国の成果を振り返り今後の方策を議論する会議であった。この会議はユネスコ（国際連合教育科学文化機関）と日本政府が主催するハイレベルな国際会議であり、ユネスコに加盟する150の国と地域から閣僚級の76人のほか、NGOや企業の代表、若者などおよそ1,000人が参加した。

この「ESD（Education for Sustainable Development）」は、2002年12月に開かれた第57回国連総会本会議において「ESDの10年」というタイトルで採択され、その後パブリックコメントや最終案の検討などを経て、2005年10月に「ESDの10年国際実施計画2005～2014」<sup>2</sup>として発表された。

「持続可能な開発（Sustainable Development）」<sup>3</sup>という概念は、1980年代初頭に国連環境計画（UNEP）や世界自然保護基金（WWF）などがすでに提唱していたが、1992年6月にブラジルで開催された「国連環境開発会議（地球サミット）」の国際的行動指針「アジェンダ21」において教育の重要性が盛り込まれたことを受けて2002年の「ESDの10年」採

択に至った。

「ESD」とは、「社会の課題と身近な暮らしを結びつけ、新たな価値観や行動を生み出すことを目指す学習や活動」であり、持続不可能な社会の課題を知り、その原因と向き合い、それらを解決するためにできることを考え実際に行動し、そうした経験を通じて社会の一員としての認識や行動力を育もうとする活動<sup>4)</sup>である。例えば、自然といのちの繋がりを感じ、地域に根ざした伝統文化や人びとと触れながら、人と自然、人と人との共存や多様な生き方を学ぶといったことも ESD のアプローチの一つとされている。従って、環境教育、エネルギー教育、国際理解教育、世界遺産や地域の文化財等に関する教育などの幅広い教育分野で取り組まれている。

## (2)「ESD」と国際理解教育実践

こうした「ESD」に関する国際社会の動きに即して世界各国の多様なセクターがその実践に取り組み始めたが、そうした動きの一つとして、2000 年 11 月、筆者は持続可能なアジア地域の構築に寄与することを目的とした国際理解教育団体「北東アジア子ども交流事業実行委員会（現『特定非営利活動法人こどもたちのアジア連合』<sup>5)</sup>」を創設した。この法人は、2001 年から今日まで 14 年間にわたり北東アジア地域に暮らす学齢期の子どもたちを対象とした市民レベルの国際理解教育活動である「北東アジア子ども交流事業・Kids' Asian Union Camp（以後「Kids' AU Camp」と表記）」の実践に取り組んできた。北東アジア地域を構成するすべての国<sup>6)</sup>の子どもたちが参加する国際交流活動であり、この地域に暮らす将来世代が相互理解を図るための学習機会を提供している。

従来から、「日・中」「日・韓」「日・中・韓」など 2～3 ヶ国間での相互交流は地道に実践されてきた<sup>7)</sup>。しかし、この地域の多様性をより広く理解し、同じ地域で共に生きているというような地域概念を形成していく点ではそうした国どうしの限定的な交流だけでは不十分であると考えた筆者は、グローバル時代における新しい国際理解教育実践として、「国家（ロー

カル)」から「地域（リージョン）」へ相互理解の射程を広げた活動を構想し実践した。

### （3）国際理解教育実践の教育的意義

そうしたリージョナルな視点を持つ国際理解教育実践は散見されるものの、その教育的意義は十分に調査・研究されていない<sup>8</sup>。従って、本研究では、持続可能な北東アジア地域の構築をめざすリージョナルな視点を持った国際理解教育活動の教育的意義を明らかにするため、筆者が14年間にわたり実践してきた「Kids' AU Camp」を一つの事例として取り上げ、この活動の参加経験者が何を学び得たのか調査し、その教育的意義を考察する。

はじめに実践事例である「Kids' AU Camp」について概説した後、参加経験者のライフストーリー調査の結果を整理し、最後に考察を述べる。

## 2. 「Kids' AU Camp」の概要

### （1）活動の背景と現況

2000年秋、青少年教育や国際協力に携わる筆者ら日本の青年3人が集まり、アジアの平和と友好を促進する国際交流キャンプを構想した。ちょうど21世紀を迎える直前の年であり、国連総会においては、2001年～2010年を「世界の子どもたちのための平和と文化と非暴力の10年」と決議するなど、「戦争と暴力の20世紀」から「平和と非暴力の21世紀」へという願いが世界中で語られていた。

しかし、私たちが暮らす北東アジアに目を向ければ、日本と近隣国の国際関係は悪化の一途をたどり民間交流も制限されるような事態も生じていた<sup>9</sup>。そうした現状を変えていきたいという思いから、青年3人は、北東アジア全域の国が参加する国際交流キャンプを企画し、手分けして北東アジア地域を構成する国連加盟国すべてを直接訪問し、協働してくれるカウ

ンターパートナーを探した。

訪問国は、韓国、北朝鮮、中国、モンゴル、ロシアの5ヶ国であった。その結果、北朝鮮を除く4ヶ国でパートナーを確保した。さっそく「北東アジア子ども交流事業実行委員会（現『特定非営利活動法人こどもたちのアジア連合』）」を創設して受け入れ準備を進め、2001年10月、日本、韓国、中国、モンゴル、ロシア、北朝鮮（本国の判断で在日朝鮮学校の児童が参加）の6ヶ国から参加者を招聘して、「第1回北東アジア子ども交流事業・Kids' Asian Union Camp」を日本で開催した。

キャンプ初日、北東アジア6ヶ国から石川県の千里浜海岸に集合した参加者36人は手を繋いで丸くなり、海で繋がる北東アジアの友好を誓い合った。福井、長野、愛知を2週間かけて移動し、各地の小中学校訪問など約2,000人の人々と交流を楽しんだ。以後、毎年開催してきたが2005年以後は会場を海外に移し、韓国（2005年、2009年）、モンゴル（2006年～2008年、2012年）、ロシア（2013年）、中国（2014年）と開催国を広げていった。日本での開催は2001年～2004年、2010年～2011年となっている。

各回の平均的な参加人数は、子ども60人、スタッフ40人の100人程度となっており、2014年現在での累計参加者数は、児童数704人、スタッフ数532人、合計1,236人（6ヶ国の合計）である。

## （2）活動の内容

年に一度、北東アジア全域から学齢期の子どもたちが開催国に集まり、大自然を舞台に「食う」「寝る」「遊ぶ」「働く」といった生活レベルの体験を共有しながら、自分たちが暮らす国際地域の多様性を体験的に学び、国境を越えた仲間づくりに取り組んでいる。主なアクティビティは、アイスブレイクゲーム、開催国の文化体験、運動会、料理大会、パフォーマンス大会、キャンプファイヤー、さよならパーティーなどである。また、宿泊の際は一つの部屋に同じ国の子どもがかたまらないようにしている。

「Kids' AU Camp」では常に6つの言語（日本語、韓国・朝鮮語、中国語、モンゴル語、ロシア語、英語）が飛び交っているが、共通言語は設定されておらず、子どもたちは言語以外にもあらゆる方法を駆使してコミュニケーションを図っている。ただし、スケジュールなどの基本情報は各国の通訳スタッフを通じて全員が共有する。傍で見る限り言語の違いは相互理解の本質的な障壁とはなっていないように思われる。それを物語るのは、キャンプ最終日の光景である。最後の夜に開かれる「さよならパーティー」が終了したあと、子どもたちは涙を流して抱き合い、時間を忘れて別れを惜しむ。会話はほとんどないが、まっすぐ目を見つめて惜別の気持ちを伝え合う子どもたちの姿からは、同じ「人間」としての共感が確かに育まれていることを感じ取ることができる。その一方で、より深い意志疎通がしたいという欲求も生じるようで、参加者の多くは外国語への関心を高め、海外へ語学留学する例も散見される<sup>10</sup>。

### （3）活動の体制と目的

この活動を主催するのは、愛知県名古屋市内に本部事務所を置く特定非営利活動法人こどもたちのアジア連合（代表理事：村上忠明）である。この法人は海外4ヶ国（韓国、中国、モンゴル、ロシア）に支部を置いている。

2001年の「第1回 Kids' AU Camp」は、大学教授、国会議員、県知事など32氏の呼びかけと文部科学省、外務省および中国、韓国、モンゴルの各大使館ほか49の公的機関の後援で実施された。日本で開催される際は、本部（日本）が運営事務局となって現地実行委員会を立ち上げ、活動の一切の事務・実務を担当する。同様に、海外で開催する際は各国の支部が運営事務局となって事務・実務を担当する。開催日、規模、スケジュールなどは、開催国の事務局がイニシアチブをとり、各国は開催国によって示された計画に沿って参加者の募集などを進めている。

各国支部は独自に事務局体制を構築するが、国によって特徴がある。例えば、日本は自然体験活動関係者で事務局を構成するが、韓国は社会福祉

関係者、中国は環境教育関係者、モンゴルは JCI 青年会議所関係者、ロシアは公立学校の教職関係者によって組織されている。また、翌年の開催国の選定などの事業計画は、活動中に開催される各国代表者会議で協議し決定されている。

「Kids' AU Camp」の目的は、持続可能な北東アジア地域（国際社会）の実現を担うグローバル人材の育成である。具体的には、日本、韓国、中国、モンゴル、ロシアなど北東アジア全域の国々から参加した学齢期の子どもたちが、大自然の中で一堂に会し、1 週間程度の共同生活（キャンプ）を通じて、お互いの違いを知り、認め合い、信頼関係を築く過程を通じてグローバルセンス（地球的視野で思考・行動できる力）を身につけ、この地域の持続可能性を高めていこうとするものである。

また、この活動は、国境を越えた各国市民の協働によって実現しているが、一般市民のトランスナショナルな協働は今後の国際理解教育活動において益々重要だと思われる。従って、国境を越えて協働する市民の姿を将来世代に示していくモデリングの機会としても位置づけている。

#### （4）活動の特徴

この活動の特徴の一つに、北東アジア各国の市民が対等な立場で協働している点が挙げられる。立ち上げの 4 年間は日本で開催したが、2005 年以降は各国が自国での実施体制を構築し、韓国、モンゴル、ロシア、中国と開催国が広がっていった。また、キャンプ期間中に各国代表者が出席する国際会議を開いて次年度の事業計画等について協議するという合意形成の仕組みも 2005 年からスタートした。

2000 年の構想段階ではパートナーがひとりもない状態であったが、日本の青年 3 人が僅かな伝手を頼りに各国を訪問して道を拓き、結果として 14 年以上にわたり志を共にする海外パートナーと出会い、協働の運営構造を作りあげた。この活動を創設した日本本部は、立ち上げや各国へのノウハウ移転については物心両面で苦勞したが、現在では、日本本部が負っ

たそれらの労力を凌駕するほどのネットワークが構築され、各国関係者の協働によってこの活動が支えられている。

### 3. 「Kids' AU Camp」の質的研究

#### (1) ライフストーリー調査

野田恵（2012）は、「経験」の意義について、デューイの経験概念に基づき、「質の高い経験とは『連続性』を持つものである」と述べている<sup>11</sup>。つまり、有意義な経験は後の行動に影響を与えるということである。「Kids' AU Camp」が質の高い経験であるのなら、帰国後もその経験は参加者の感性、認識、行動に影響を与えるものと考えられる。

そこで、本研究では、「Kids' AU Camp」の参加経験者の「語り」から、この実践が参加者にどのような影響を与えているのか、その経験の内実および教育的意義について考察していきたい。

具体的には、「Kids' AU Camp」の参加経験者を対象に、「ライフストーリー調査」を実施し、この活動の参加後の人生において、その経験がどのように連続性を持っているのか、持っているとするればそれはどのような内容なのかを明らかにするためのインタビュー調査を行う。この調査によって、その経験が参加者のその後の人生にどのような影響を与えたのか、影響を与えた経験とはどのようなものだったのか、その影響の内実を明らかにしていく。

#### (2) ライフストーリー研究の概説

ライフストーリー研究の特徴と意義について、やまだようこ（2000）と野田（2012）のライフストーリー研究<sup>12</sup>を参考にしながら以下の通り整理する。

ライフストーリー研究とは、「ライフ（人生、生活、生）を生きていく過程、その経験プロセスを物語る行為と、語られた物語についての研究を

さす」<sup>13</sup>。

野田（2012）は、「ライフストーリー研究は、多くの場合、非構成的なインタビューを用いて語りを採取し、心理学研究では、新たな研究領域として研究蓄積が見られる。ライフストーリー研究は、サンプル数の少ない事例を扱う時、仮説の生成や『人々の内的側面、意味世界の様相やその変化を捉える』のに向いている」と説明している。

また、ライフストーリー研究の意義について、「たいていの人は、普段『論理－実証モード』ではなく、『物語モード』でその『生』を生きている。『論理－実証モード』とは、真実はただ一つであるとみなし、出来事を『真偽』『因果関係』で捉える。一方『物語モード』では、ある2つの出来事を関連づける際に、多様な解釈や矛盾した意味づけがなりたちうる。『論理－実証モード』と『物語モード』の2つは異なる知の様式であり、相互補完的であり、一方を他方に還元することはできない。そのため、『普通の人々が普通にしていること』の意味を知りたいのならば、人生を物語として見る研究が必要であり、そこに『ライフストーリー』の意義がある」とやまだ（2000）の研究を整理している。

ライフストーリー研究は、「真実」「本音」など「論理－実証モード」とは異なる。つまり、数値では表しがたい内実を知るのには役立つが、ほかの質的研究と同様に再現性に乏しく、誰が聞いても同じライフストーリーが語られることは通常まれであろうし、研究者の主観に基づくものではないのかという信頼性への疑問や批判も根強いという<sup>14</sup>。

一方で、量的調査についてもその妥当性に対する疑問が指摘されている。野田（2012）は、量的調査やその他の質的調査との相互補完が重要であると述べ、ライフストーリー研究は、量的調査やそのほかの質的調査と必ずしも対立するものではなく、相互に補完しあいながら分析を行うことで、より力を発揮できると述べている。

本研究では、できるかぎりインタビューの記録、方法、分類、解釈などを明確に説明することでライフストーリー研究の「信頼性」と「妥当性」



を高めていきたいと考える。

### (3) 「Kids' AU Camp」参加経験者のライフストーリー調査

本研究では、特定非営利活動法人こどもたちのアジア連合が主催する「Kids' AU Camp」の参加経験者を対象にライフストーリー調査を実施した。

#### 1) インタビューの方法

インタビューは、2012年8月～10月にかけて実施した。第1回（2001年）から第12回（2012年）までに「Kids' AU Camp」に参加した延べ参加者数（子ども）は、579人であり、国別内訳は、日本121人、韓国145人、北朝鮮32人、中国88人、モンゴル123人、ロシア70人となっている。そのうち、進学・就職など何らかの選択を経験したと考えられるおおむね18歳程度（2012年10月現在）の参加者は197名で、内訳は、日本38人、韓国51人、北朝鮮14人、中国33人、モンゴル38人、ロシア23人となっている。これら全ての対象者とコンタクトをとって調査することは困難であると判断し、参加者名簿に基づき可能な範囲で候補者リストを作成し筆者が直接電話をかけて協力をお願いした。

また、日本人との比較も視野に入れ、日本以外の国の参加者も対象とした。日本以外の国の対象者については、各国のKids' AU支部代表者に筆者が直接連絡し、本調査の目的を伝え協力をお願いした。

その結果、インタビューにご協力いただいたのは、表1の方々である。

表1の通り、今回のインタビューは、日本人5人、韓国人2人、モンゴル人1人の合計8人に行った。韓国人の2人とモンゴル人の1人については、2012年8月下旬にモンゴルで開催された「第12回 Kids' AU Camp in MONGORIA<sup>16</sup>」の活動期間中に行った。日本人の5人については、2012年10月初旬に東京で行った。なお、海外の参加者へのインタビューはすべて通訳<sup>17</sup>を入れて行った。

表 1

インタビュー協力者一覧								
ニックネーム	ラッキー	ナツキ	ショウヘイ	ノミン	ヘリン	ユラ	キスケ	ワカ
参加後	11 年	10 年	10 年	9 年	9 年	8 年	5 年	4 年
参加学年	※小 6	※中 1	小 5	小 6	※小 4	小 6	※小 6	※中 1
性別	女	女	男	女	女	女	男	男
現在年齢	20 代前半	20 代前半	20 代前半	20 代前半	20 代前半	20 代前半	10 代後半	10 代後半
職業	大学生	大学生	大学生	大学生	大学生	大学生	高校生	高校生
国籍	日本	日本	日本	モンゴル	韓国	韓国	日本	日本
インタビュアー	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上	村上

注：表中の「参加後」「学年」「年齢」はすべて 2012 年現在の数値。「※」は複数年参加経験者

インタビューは一回ずつ行い、一回のインタビューはそれぞれ 1 時間程度であった。インタビューの記録は許可を得てテープレコーダーに録音しノートにメモした。野田（2012）<sup>18</sup>らの先行研究を参考にし、表 2 に示した「倫理規定」を設定し、その規定に従い協力者に説明を行った。

インタビューでは、調査の趣旨と聞きたい内容をあらかじめ伝えた上で、和やかな雰囲気に対象者自身の自由な語りが妨げられないように配慮した。録音されたインタビューは、逐語記録を作ったのち、口語体を直す、話の順番を入れ替えるなどの編集を表 3 に示す「編集方針」に従って行った。

表 2

【倫理規定】
●調査の趣旨、研究方法および研究体制についての説明
●インタビューの内容、インタビューの回数・時間について説明
●録音の許諾、データの保管と利用についての説明
●話したくないことは話さなくてよいこと、インタビューの途中で中止も可能であることの説明
●結果の公表については、公表する予定と公表には許可を得ることの説明
●結果の公表の際には、プライバシーの配慮を行い、公表の際には、個人が特定されないようにすることの説明

表 3

【編集方針】

- 句読点、段落を適時付ける
- あー、えー、などの言葉や口癖、ひとり言、あいづちなど意味を持たない言葉を原則削除
- 言い間違いを削除「えっと、1999 年、じゃなかった 98 年に」→「1998 年に」
- 倒置など語順を直す「違うわけ、それが」→「それが違う」
- 助詞を補う「こっち来て」→「こっちへ来て」
- 崩れたしゃべり言葉を直す「やっぱ、○○じゃないかと」→「やはり○○ではないかと」
- 文末を整える、長い文に語尾「そんで転職して、でもって」→「転職しました。そして・・・」
- 話し言葉を書き言葉へ（語調などの変更）
- （笑）の挿入
- 話題の順番を移動して整理（同じ内容の話題をまとめる等）
- わかりにくい言い回しや表現を、意味を変えない範囲で修正（極力避ける）
- 聞き手の削除（聞き手の言葉も語り手の言葉に含めて記述）
- 語尾や口調は雰囲気を残しながら、語り手によってかえる
- 言い淀み、考えている無言の時間は時間の長さにかかわらず「・・・」で表記

## 2) インタビュアーと協力者の関係性

野田（2012）によれば、調査にあたっては、対象者の不安感や不信感を取り払い、信頼を得ることや、相互に理解し合う「ある程度親密な」関係（ラポール）を作り上げることが「正確なデータ」を収集するためには重要であると言われてきたという。しかし、「ある程度親密」な関係が存在したからといって、語られた内容はインタビュアーや世間を意識しているわけであり、それがそのまま「本音」や「真実」であるわけではない。つまり、「ライフストーリー」は、語り手と聞き手の対話的構築物であるという。

今回の調査では、協力者とインタビュアーは「参加者」と「スタッフ」という特殊な関係性があった。筆者は 2001 年から現在まで「Kids' AU Camp」のスタッフとしてこのキャンプに参加しており、協力者全員と面識があり同じキャンプを経験している。従って、現場の空気や出来事を共有していない調査者には持てない、「ある程度親密な」関係がすでにあっ

表 4

【インタビューで聞きたい内容】

- いま何をしていますか
- Kids' AU Camp に参加しようと思ったきっかけは何ですか
- 参加後に自分の中で何か変化はありますか
- 北東アジア 6 ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたことは何かありますか
- Kids' AU Camp で一番印象深い出来事は何かありますか
- スタッフについて何か印象はありますか
- あなたの人生にとって Kids' AU Camp はどんな存在ですか
- その他、自由に話してください

た。つまり、インタビュアーと協力者の間には経験の共有があり、語り手は、「あの時・・・」「あそこで・・・」「あの子が・・・」など、キャンプでのほとんどの出来事を一般的な説明なしで話すことができたと思われる。

一方で、野田が指摘<sup>19</sup>しているように、調査者と被調査者の同一化「オーバーラポール」の問題も考えられるので、インタビューにあたっては客観性を失わないよう意識しながら行った。

### 3) インタビューの視点

インタビューにおいては、リージョナルな枠組で実践されている国際理解教育活動での経験が参加者のその後の人生にどのような影響を与えているのか、あるいは与えていないのか、また、影響を与えているとすればそれはどのような内実なのかを聞き出そうと試みた。協力者にはあらかじめインタビューで聞きたいこととして表 4 に示した内容を伝えた。

### 4) インタビューの結果

表 3 にある編集方針に照らしながら、8 人のインタビュー内容について特徴的な語りが見られる部分を抜粋し、以下の通りケースごとに整理した。なお、インタビュアーの質問は、ゴシック体の太字で表記した。

【ケース1 ラッキー（大学生 女 参加後 11 年／小 6 で初参加（参加経験 2 回）日本人）】

●キャンプ参加後から現在までの歩み

はじめは、単純にいろんな国の人が来てキャンプするので面白そうだと思って参加した。Kids' AU Camp での経験を契機に、語学に関心を持つ。高校時代には短期海外留学などを経験し、大学は外国語学部へ進学。ポルトガル語を専攻し、現在はブラジル人の支援活動に興味を持っている。

●ラッキーの語り

－Kids' AU Camp で一番印象深い出来事

私が一番仲良くしていた子が、モンゴルの子でゲレルという子でした。私はたぶんモンゴルチーム（のサポーター）だったので、一緒にご飯とかも作りました。ゲレルが体調を崩して、言葉はお互いつたない英語でしたが、ゲレルがキャンプ場で具合悪くなった時に、帰ることになった時一緒に私に来てほしいっていてくれて、それがすごくうれしかったです。①一緒に、夜、なに話したか覚えていないけど、今思ったら、どうやって話していたのかわからないけど、（一緒に）お風呂入ったりとか、湯船の中で二人で歌ったりとかしました。

－参加後に自分の中で何か変化は・・・

国内だけの人間関係でしたが、急に、北東アジア、アジア圏ではあるけど、おんなじ年代の人でもこんな国の人がいるんだと思いました。②たぶん言葉が通じない人ってのはじめて会ったかもしれません。その時に、小 6 の時に、将来になりたい職業として通訳になりたいって思いました。それで中学校ですごく頑張って英語を勉強しましたが、結局いまはポルトガル語やっています。そこで、何か言語をやりたいなっていうことを思ったから、たぶんいま言語を勉強していると思います。

－なぜそう思いましたか？

結構、強烈に覚えていますよ。何日間の日程か覚えていないけど、子どもだから、言葉が通じなくても仲良くなれる部分はあると思います。でもやっぱり、③もっとしゃべれたら、もっと仲良くなれるのだろうなって、すごく思ってた。すごく充実していたけど、ちょっと後悔の残るキャンプだったから・・・。

－6ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこと

一緒にご飯とか作ったりする時、④やっぱり似ているところは結構あって・・・。いろんな国と比較できるのが面白い。すごく面白いところだと思う。

－Kids' AU Camp は自分にとってどんな存在か

⑤そこで世界や視野が広がって、他の国の文化や言葉を強く学びたいという思いが芽生えたから、たぶん私は大学の専攻も外国語を選択したと思います。高校の時も結構色々な国へ留学していたから、ほんとに私の生き方に大きく・・・生き方いうと大きすぎかな・・・好みとか考え方、興味のあるものとかにすごく影響していると思います。

今つきたいと思っている職業があって、公務員をめざしています。ポルトガル

語を専攻しているんですが、ブラジル人の出稼ぎの人って結構日本にいます。あまり日本語を学ぶ機会がないとか⑥言葉が話せないからやっぱり仕事も限られてくるとか、そういう実態があるみたいで。・・・そういう人たちと関われるような仕事をしたいです。

－スタッフの印象は

④特にないです。顔は覚えているけど、特にスタッフって感じがしてなかった。

－参加時期についての語り

⑦いまどんな年齢の人が参加しているのかわからないですけど、私が参加したみたいに、小学校低学年とか、小っちゃいうちに参加するってのが私は結構「みそ」だと思っていて、やはり、高校とか大学では学校の交換留学とかワーキングホリデーとかありますが、それはそれでいいと思いますが、やはり、大人になるにつれて、色々と偏見とか、それこそ、英語ができてみんなで通じ合えちゃうみたいのがあるから、やはり、少し感じ方に差が出てくると思うし、少し予定調和みたいな感じになるだろうから、本当に素直な感じ方とか、すなおな行動ができる、小さい時に参加できたのはすごく意味があったと思っています。私は偶然参加でしたが、ほんとに幸運だったと思います。

【ケース2 ナツキ（大学生 女 参加後 10年／中1で初参加（参加経験2回）日本人】

# ●キャンプ参加後から現在までの歩み

Kids' AU Camp には単純に面白そうだと思って参加した。高校は美術コースを選択し大学は美術学部彫刻学科に進学した。海外に興味がありイギリス・ドイツなどヨーロッパに長期滞在した経験がある。

## ●ナツキの語り

－Kids' AU Camp で一番印象深い出来事

一番印象的なのは、みんなすごく仲よくなって、帰りに、韓国チームが名古屋空港から帰る時に、日本人が⑧見送りに行って、みんなで大号泣したのを覚えています。

⑨やまびこ館（宿舎）で泊まった時に、夜、スタッフは会議があって、その前に消灯時間になります。スタッフはみんな食堂に会議へ行きます。子どもたちはそれ知っていたので、男女で何部屋かにわかれていたけど、抜け出して外で鬼ごっこでもしようという話になりました。外に出るには食堂の前を通るしかなくて、みんなで匍匐前進しました。

食堂の窓がガラス張りになっていたでしょ……。でも、下半分が板でした。これなら、匍匐前進すれば行けるみたいな話になって、列になって進んでいきましたが、なにか物音がしたらしくて、ガラス側のスタッフに見つかって、ひどく怒られたのを覚えています。

－どうやって口裏合わせしたのか？

どうやってかはわかりません（笑）。言い出したのは韓国の子どもだったよう

な気がします。⑩朝鮮学校から参加していた子が日本語と韓国語でやり取りして、韓国・日本がわかれば、あとはゼスチャーとかでロシア、モンゴル、中国へは簡単でした。みんなで「行くぞ！って」(笑)。でも、ひどくおこられました(笑)。スタッフは会議を中断して、みんなが寝るまで見張っていました(笑)。

ー参加後に自分の中で変化は・・・

⑪言葉が通じなくて、例えばロシアの子とかがって全然、外見が違ったりしますし、言葉はみんな違うけど、やはり面白いことはみんな面白いし、人気者は人気者だし、嫌われる子って、みんなから言われてるし、そういう感覚みたいなものって共通してるんだなっていうことはすごく思いました。・・・だから全然、変わらないんだなって思いました。

ー6ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこと

⑫今思っても、お国柄って絶対にあるなって思います。中国の子どもたちはすごい。印象に残っているのが、天竜川でカヌーをやって、国ごとに分かれて乗船した時、すごくおもしろくて、中国はみんな船の上で、あっちこう、いやこっちこうという感じでした。それがすごく印象に残っています。みんな自己主張してくるし、はっきりしていました。韓国はすごく明るかった。盛り上げ上手は韓国でした。あと、ロシアはやっぱり6ヶ国の中で1ヶ国だけ外見が違うでしょ。顔が違うから。それが子どもながらに、多分みんな、最初は躊躇すると思います(笑)。子どもながらにどこか微妙にバランスをとっていました。例えば、リーダーが一人出てきてみんなを盛り上げていくとか。

ーKids' AU Camp は自分にとってどんな存在か

いまは、各国に対して知識があるしニュースも見るので情勢とかも今の方が圧倒的に知っていますが、すごく面白かった体験を2回して、それがあから、例えば、⑬1対1になった時に、日本人でも違う国であっても、全然変わらないということは、たぶん北東アジアで強烈に学んだことかなって・・・私は、海外旅行が結構好きで、去年はイギリスに2カ月滞在して、ドイツにも1ヶ月行ってきましたが、長期滞在になると現地で知り合いができたりしますが、⑭そういう時に、それが根本にあるから、変な偏見とか、変な先入観がないです。やはりその感じ方は間違っていない。この年になって海外の人と接しても北東アジアキャンプで感じたことは全然変わっていなかったと思います。

ースタッフの印象は？

⑮みんな大好きでした。面白くて。スタッフもたぶんすごく楽しんでいて、だから、すごく一緒に楽しめました。

### 【ケース3 ショウヘイ(大学生 男 参加後10年／小5で参加 日本人)】

#### ●キャンプ参加後から現在までの歩み

参加当時はパイロットになるのが夢で外国に興味を持っていた。他の国の人と会ってみたいという気持ちがあり参加した。大学は工学部で機械システム工学を専攻している。

● ショウヘイの語り

－Kids' AU Camp で一番印象深い出来事

そう、あれかな。確か韓国の人が最後に帰りました。僕いまでも歌えますが、アリランという歌をおしえてもらっていたので、⑮最後、別れる時に空港で韓国語を叫びながらアリランを歌った気がします。それで大泣きました。みんなで大泣きました。確か、空港の出国ゲートに入る時でした。なっちゃんも、もゆも、だいきとかも、みんな泣いていた気がする。あれはヤバかったです。

－参加後に自分の中で何か変化は・・・

別に変ったことではないですが、⑯高校で友達が領土問題に関して中国人や韓国人をばかにしていたけど、僕は今連絡取っているわけじゃないけど、親しみがあります。

－6ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこと

⑰確かにいろんな国の人がいると思いましたが、今言われてみれば確かに6ヶ国で集まっていたかもしれないけど、子どもの時は別に何もなかったです。

一回、ロシア人と韓国人が喧嘩しました。じゃれあいがちょっとすぎて、喧嘩みたいになって、それを僕と中国人の子どもが一緒に止めて・・・全然英語はわからなかったですが、「ソーリー」とか知っている単語を使って、一緒に仲直りさせようと思いました。結局お互い謝って仲直りしました。僕はすごいことだと思いました。国がたくさんあることに対して別にそれほど感じてなかったかな・・・。こういうものかなと思っていました。1ヶ国よりはいっぱいいたほうが面白かったかなと思います・・・。

－Kids' AU Camp は自分にとってどんな存在か

ほんとに楽しかったし、留学とかをしなかったら普段は外国人にあまり会わない中で、⑱普通じゃあり得ない小さい時に、友達、仲間、そういう存在ができてすごいと思います。そういう意味では、いまもこうやって思い出して会いたいなと思うたり、同窓会やりたいと思うってことは、大切な存在だったのかなって思います。

本当に参加してよかったと思うし、昔から海外とか好きだったけど、外国人が大好きになった。結構人見知りですが、話したいし交流したいです。いろんな国の人と仲良くなりたくなったっていう気持ちがあると思う。そういうことを教えてくれたっていうか、もとからかわからないけど、北東アジアのキャンプがあって、そんなふうになったんじゃないかなと思います。

－スタッフの印象は

スタッフ、⑲覚えている人は朝鮮学校の先生かな・・・。その人しか覚えていません。

－人間としての出会いについての語り

⑳特に歴史も知らないし、世界の言葉も全然わからないから、純粋な気持ちで親しくしようと思って、そう思えば仲よくなれたし、本当に何も考えずに楽しくやろうと思って、今じゃそれは難しいです。色々別の見方もでてくるから・・・。

－いまでは無理ですか



あの時みたいな、何も考えずにというのは。外国人と仲良くしたいけど、色々学校で学んだから、文化の違いとかだんだん分かってくるし。何もない状態からお互いを探り合うっていうか、知り合う、試行錯誤しながら知り合うっていう経験は、あの時じゃなかったらできなかったのかなって思います。まず、なんか、別のことを考えてしまう。「この人たちこの国だからこういう感じなのかな」みたいに。

#### 【ケース4 ノミン（大学生 女 参加後9年／小6で参加 モンゴル人）】

##### ●キャンプ参加後から現在までの歩み

Kids' AU Camp 関係者の紹介で参加した。小さい頃、トルコで開催された国際キャンプに参加したり、日本に3ヶ月ほどホームステイした経験を持つ。Kids' AU Campに参加してからアジアを強く意識するようになり、「アジア留学」を決意した。現在、中国の大学に留学し、国際政治学を専攻している。2012年のKids' AU Campにモンゴルチームのスタッフとして参加した。

##### ●ノミンの語り

###### －Kids' AU Campで一番印象深い出来事

特別に何かというのはほとんどありませんが、ただし、①私の心の中に一番残っているのは、日本のスタッフのみなさんがすごく素晴らしかった。

###### －参加後に自分の中で何か変化は・・・

このキャンプで、私が変わったことは、一つは、②いろんな知らない人と、コミュニケーションが取れることを身につけました。一つは、このキャンプに参加してから、将来はアジアの大学に行くということを決心しました。だからいま中国の大学に行っています。この北東アジアの子どものキャンプに参加して、これからはアジアのことについて、アジアの文化について知らないといけないかなと、初めて思いました。

###### －6ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこと

・・・ほとんど、日本の子どもたちと友達になりました。みんなすごく興味があったし、日本と韓国の子どもが私にすごい影響を与えました。

###### －どんな影響ですか？

一つは、日本の子どもたちは、お互いに助け合うという点があるので、それはすごい勉強になった。③もう一つは、人前に立って自分の意見をちゃんと述べるというのが日本の子どもたちにあったので、それはモンゴルの子どもたちには何でできないのかなと思い、モンゴルの子どもたちにもできるはずだと思いました。

それぞれ自分の国ですが、その個々の国ではなく、④みんなと一緒に交流することが大事だというものをはじめて感じました。

###### －なぜそう感じましたか？

実は、モンゴルの子どもたちを見ると、あまりうまく交流ができないなというのがありました。自分もほとんど日本と韓国の子どもたちと交流していたので、特別な理由はないけど、本当はみんなと一緒に交流していくのが素敵だなと

素直に思いました。

－Kids' AU Camp は自分にとってどんな存在か

大人になるまで、㉕国際キャンプは3回くらい参加しましたが、その中で一番印象深くて記憶に残っているのは Kids' AU Camp です。私の心の中で一番重要な存在になっています。

－将来についての語り

私はマスター（修士号）をとりたいと思いますが、その途中で、できれば大学を卒業したあとに、ウランバートルに戻り外務省で仕事をしたい思います。

－外務省でどんな仕事がしたいのですか？

私は、一人のモンゴル人としてモンゴルで生きていきたいと思いますし、自分の専攻も国際政治学ですので、国際的に色々な人と関わって仕事するというのは、やはり外務省ではないかと思っています。あと、モンゴルのために尽力したいと思っています。外務省にはいつ Kids' AU Camp と関わりあっていきたいと思っています。

－その考え方に Kids' AU Camp は影響していますか？

直接、Kids' AU Camp がすごい影響を与えているというわけではないですが、小さい時からいろんな外国に行ったり、いろんな外国の子どもたちと交流して、自分が外務省で今後活躍するのが自分にすごく合っているのではないかと考えています。多分間接的に影響があると思います。一番、(Kids' AU Camp が) 影響したのは、アジアのどこかの国の大学に入って勉強したいと思ったことです。

## 【ケース 5 ヘリン（大学生 女 参加後 9 年／小 4 で初参加（参加経験 3 回）韓国人】

### ●キャンプ参加後から現在までの歩み

2001 年に兄が Kids' AU Camp に参加したことがきっかけで、翌々年に自分も参加した。ラッキー、ナツキ、ノミンとは 2003 年の Kids' AU Camp で出会っている。貧困層の子どもたちを対象にした文化活動、キャンプ活動などのボランティアをしている。現在、大学で消防防災工学を専攻し、女性消防士をめざしている。2012 年の Kids' AU Camp に韓国チームのスタッフとして参加した。

### ●ヘリンの語り

－Kids' AU Camp で一番印象深い出来事

㉖最後の日のお別れの時間に、お互いに涙を流した記憶です。

－その時はどんなきもちでしたか？

いつかまた会えると思うけど、住んでいるところがお互いに遠いから悲しかったです。

－6 ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこと

㉗国が違って、言葉が違って、お互に通じるということを感じました。楽しみや、悲しみも、（感じることは）すべてがみんな同じだと思いました。だから、文化的な違いでコミュニケーションがうまくとれない仲間がいれば、手伝い

たいと思いました。

－Kids' AU Camp は自分にとってどんな存在か

短い時間ですが、その中で、色々なことを感じて、いろんなことを学ぶことができました。㉘それは人生の部分ではなく、私の人生に深く絡み合っています。

－スタッフの印象は

㉙一つの国じゃなくて、アジアの各国（のスタッフ）がここに集まって活動したことの国際的なイメージがわたしには重要なものになっています。 当時も今もスタッフに感謝することが多いです。

－Kids' AU Camp はどんな場でしたか－

このキャンプから帰った後に、どんな状況があってもこのキャンプでいろんな人と出会ったという記憶が私の力になると思う。㉚日本に対しても特に韓国人たちは昔、日本が韓国を支配した悪い記憶や偏見があっても、このキャンプはそんなことを忘れて、みんなで一緒に未来を創る、新しい歴史を創る（場所だ）と思います。 私のようにこのように成長し、スタッフとして参加したら新しいことも経験できるし・・・。

## 【ケース6 ユラ（大学生 女 参加後8年／小6で参加 韓国人）】

### ●キャンプ参加後から現在までの歩み

Kids' AU Camp は、知り合いの誘いで知り、海外への興味があって参加した。大学では児童福祉学を専攻し、ユニセフ、セーブザチルドレンなど、子どもを支援する国際的な組織で働く夢を持っている。2012年のKids' AU Camp に韓国チームのスタッフとして参加した。

### ●ユラの語り

－Kids' AU Camp で一番印象深い出来事

㉛最終日にキャンプファイヤーをして、その時白いTシャツに各国でサインを書きあい、その時に感動し、当時、泣いたこと。 それと、料理大会です。

－参加後に自分の中で何か変化は・・・

㉜最初はことばの問題とか不安がありましたが、実際参加してみて、身振りや手ぶりでコミュニケーションが図れることに気づきました。 片言ですが、外国語と触れることによって、外国語がしゃべれないというコンプレックスはだいぶ消えました。

参加する理由に、外国の人と交わりたいということがありましたが、それ（言葉）が心配ですが、（コミュニケーション）できたという達成感がありました。

－6ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこと

韓国の人たちばかりをみてきましたが、はじめて外国の子どもたちに触れて、㉝こんな人もいるんだ、あんな人もいるんだということを感じました。 多様な国の人たちを見られたことは良かったです。

－スタッフの印象は

㉞当時、各国のスタッフたちが非常に親切に接してくれたことを覚えています。

－Kids' AU Camp は自分にとってどんな存在か

③④ Kids' AU Camp は、私を成長させてくれました。特に消極的な部分が多かったが、外国の人と触れあうなど、参加する過程で非常に成長しました。また、リーダーシップや、責任感も感じられるようになって、そういうところが成長に繋がっていると思います。国際的な視野も広がったように思います。

【ケース 7 キスケ（高校生 男 参加後 5 年／小 6 で初参加（参加経験 3 回）日本人】

●キャンプ参加後から現在までの歩み

色々な国の人が来るので単純におもしろそうだと思い参加した。現在、高校でものづくり工学科に所属し、鉄道や飛行機など乗り物の勉強をしている。将来はエンジニアとして、海外で活躍したいという夢を持っている。

●キスケの語り

－Kids' AU Camp で一番印象深い出来事

③⑤ 3 回通して、すべて最終日が一番の思い出です。わずかな時間だけど一緒に暮らしてきて、友達になって、その日が終わればもう別れてしまうというので、当時はすごく悲しかったです。3 回とも全部泣いたと思います。わずかな時間でしただけかなり仲よくなりました。一番実感できました。

－6ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこと

③⑥ 1 対 1 だと、変化っていうのはわからないけど、6ヶ国参加したことで、食事や衣装とか、何にしても、それぞれ違うものが出てきて同時に見られるので、その差というか文化がちょっと違うだけで、すごく違うとか似ているというのが良くわかります。

1 対 1 だとどうしても、「それはそれ」って別々で考えてしまうところがあるかもしれません。

－Kids' AU Camp は自分にとってどんな存在か

・・・そう、やっぱり体験した時は、その体験が楽しかった。中学生だし深く考えてなかったけど、③⑦ わかってきたことによって、色々考え方が変わったりとかしました。今の問題、尖閣とかそういうのも、日本人から見た立場もあるし、中国人から見た立場もあるなど。

－スタッフの印象は

③⑧ 通訳とかで頼るくらいであとは（スタッフの存在は）あんまり気にしてなかったです。

【ケース8 ワカ（高校生 男 参加後4年／中1で初参加（参加経験2回）日本人）】

●キャンプ参加後から現在までの歩み

面白そう、楽しそうという気持ちで参加した。現在、高校で機械科に所属し、旋盤技術などを勉強している。ものづくりが好きで将来は技術者をめざしている。子どもキャンプや地元の学童保育などボランティア活動にも参加。2009年のKids' AU Campでは日本チームのスタッフとして参加した。

●ワカの語り

－Kids' AU Campで一番印象深い出来事

㉟最終日のさよならパーティーです。あの時、みんな別れを惜しんでいました。泣きそうでした。

－なぜ、泣きそうに？

また会おうと言いつつも、実際の頭の中ではもう会えない（ことがわかってい）る人とたくさんいるから、そういうのとか考えたりすると、最後の別れのよう

にさみしく感じました。

－6ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこと

㊴最初、行く前は不安でした。言葉が通じないからどうしようという思いがあっ

て、キャンプ中どうしたらいいだろうと考えていました。通訳の人もいるけど、

つきっきりではないので自分で伝えないといけないし。英単語でしか会話できな

かったですが、一番できたのはゼスチャーです。向こうの子も多分一緒にの気持ち

だったから通じ合っていました。

㊵自分から人と繋がろうとか、コミュニケーションしようとするようになりました。

キャンプの中で心の中で人と繋がろうとする気持ちが生まれたから、みんな

とご飯食べられたし、遊べたし、一緒にねむれたし、一緒に生活できたと思いま

す。

－なぜそのような変化が？

㊶言葉だけでも普通に過ごせていました。ご飯食べる時は日本、中国、韓国とか

ぐちゃぐちゃになっていました。どういうふうになったかわかりませ

んが、ご飯食べ終わったらみんなでサッカーにいったりしました。

㊷おそく遊びです。遊びから始まっていきました。部屋にポーンと置かれるよ

り、最初から遊びをやった方が、とけこむ感じが全然違うと思います。

－その楽しさは何だと思いますか？

楽しさというより、うれしさです。不安だったことが、不安ではなくなるから。

最初は会話できるかなというような不安がありましたが、㊸みんなで遊んでいる

うちに自然に笑顔になっていって、いつの間にか不安もなくなっていきました。

そういう時が、一番うれしい時でした。

－Kids' AU Campは自分にとってどんな存在か

㊹なんていうのかな・・・。Kids' AU Campに参加して自信ができました。英

語話せなくても海外でやっていけるというような、生き方に関する自信が付きま

した。刺激になりました。刺激を受けて英語勉強したりしました。

ー違いの捉え方についての語り

㊦6ヶ国みんな混ざってもそんなに違いがないと思いました。最初は海外だからアメリカとかの海外を想像していましたが、全然違いもないし、違和感もなかったです。普通に遊んでいてもルールも大体一緒でした。こまかい生活面とかでは色々変わってくるけど、なんていえばいいのか、㊦人間の、人としてはみんなそんなに変わらない。言葉は違いますがあと他に何が違うかって言われるとわからないです。

#### (4) インタビューの考察

参加者は「Kids' AU Camp」をどのように受けとめているのであろうか。また、参加者はそこで何を経験し、どのような影響を受けたのであろうか。

ここでは、特徴的な語りを取り上げながら、この活動の教育的意義について、『経験の連続性』とその内実、「リージョナルな視点への影響」、という二つの観点から Kids' AU Camp での経験が参加者に与えた影響について考察していく。

##### 1) 「経験の連続性」とその内実

「Kids' AU Camp」の経験は、単なる国際的なイベントとして一過性のものでしかないのであろうか。もしそうだとすれば、地球的視野で思考・行動できる力を備えたグローバル人材を育成するという目的とは乖離したものになるであろう。反対に、現在の参加者の人生の選択や認識の到達点に影響を与えているとすれば、そこに一定の教育的意義を見出すことができるであろう。すなわち「経験の連続性」があるのかなのか、また、あるとすればそれは具体的にどのようなものなのか、その内実を考察していきたい。従って、ここでは①人生の選択への影響、②認識への影響、いう二つの視点から経験の意味を考察していく。

八  
九

##### ①人生の「選択」への影響

ラッキーは、色々な国の人が来てキャンプするので面白そうだという単純な動機で参加したが、6ヶ国の子どもたちと実際に出会ったことで、

「世界や視野が広がって、他の国の文化や言葉を強く学びたいという思いが芽生えた。」(表中⑤参照、以下参照する番号のみ表記する)という。特に、偶然自分がサポートに入ったモンゴルの参加者「ゲレル」との出会いを通して、「言葉」について二つの相反する思いを抱いた。一つは、「今思ったら、どうやって話していたのかわからないけど、(一緒に)お風呂入ったりとか、湯船の中で二人で歌ったりとかしました①」と語っている通り、言葉を「越えて」相互理解、相互承認が成立したこと、つまり、言葉が通じなくても分かり合うことができたという「うれしさ」であり、もう一つは「もっとしゃべれたら、もっと仲良くなれるのだろうなって、すごく思ってた……。すごく充実していたけど、ちょっと後悔の残るキャンプだったから……。③」と語っている通り、「言葉」がわかればもっと分かり合えたという「悔しさ」である。この二つの思いは、その後のラッキーの心の中に深く根ざし、人生選択の動機づけとなっていた。

ラッキーは、キャンプ後には通訳になりたいと思い、中学で「すごく頑張って」英語を勉強し、海外でホームステイし、大学では外国語を専攻し、現在は「言葉」に困る人々の役に立つ職業に就きたいという②、⑥。ラッキーの一貫した考えとその歩みから推察できることは、「Kids' AU Camp」で体験した「言葉」への思いを基礎として、人間が分かりえることのうれしさや大切さ、すなわち、相互理解、相互承認の肯定的な意義を学習したということではないだろうか。

このように、「Kids' AU Camp」は、ラッキーの興味・関心、考え方や生き方に一定の影響を与えた経験として位置づけられている。ラッキーにとって「Kids' AU Camp」は、人生の「選択」に大きな影響を及ぼした経験であり、それは、11年前の「悔しさ」によって抱いた「通訳になりたい②」という思いが、参加後11年もの時間が経過した現在に至ってもラッキーの人生の「選択」に具体的な影響を与え続けていることから理解することができる。

ノミンは、「Kids' AU Camp」に参加したことで、自分の中に二つの変

化を感じたと語っている。一つは、「いろんな知らない人と、コミュニケーションが取れること」を学んだこと、もう一つは、「将来はアジアの大学に行くということを決心」したことだという<sup>22)</sup>。

「Kids' AU Camp」に参加する以前にも国際キャンプに何度か参加しており、ノミン自身はすでに国際的な興味・関心を持っていたと思われるが、語りの中に「はじめて」という言葉が何度か出てくる。「Kids' AU Camp」に参加して、「アジアの文化について知らないといけなかなと、はじめて思いました。」、「みんなで一緒になって交流することが大事だというものをはじめて感じました。」<sup>22)</sup>、<sup>24)</sup>。

また、「国際キャンプは3回くらい参加しましたが、その中で一番印象深くて記憶に残っているのは『Kids' AU Camp』です。私の心の中で一番重要な存在になっています。<sup>25)</sup>」という語りから推察すれば、6ヶ国の子どもたちが参加する「Kids' AU Camp」の経験によって、各国への個別的な興味・関心だけではなく、「アジア地域」に対する興味を強く持ったということが考えられる。そうしたノミンの意識は、参加から6年後、中国の大学進学という形で具体化された。一方で、ノミンは将来ひとりのモンゴル人として生きていきたいと思い、モンゴルのために尽力したいという。その具体的な実現方法として「外務省」で働くことをめざしている。

ノミンは、6ヶ国の子どもたちとキャンプして感じたこととして、当時、「人前に立って自分の意見をちゃんと述べるというのが日本の子どもたちにあつたので、それはモンゴルの子どもたちには何でできないのかなと思ひ、モンゴルの子どもたちにもできるはずだと思ひました。<sup>23)</sup>」と語っている。この語りは、「自分（たち）にもできるはずだ」という児童期の典型的な発達課題<sup>26)</sup>にも繋がるものだが、ノミンがモンゴル人としてのアイデンティティを確立する過程で、「Kids' AU Camp」の経験が一定の影響を与えてきたことを伺わせる。

このように、「Kids' AU Camp」はノミンがアジア地域の文化をもっと知りたいと思う直接的な影響を与えて中国への大学進学を促した。そして、



大学では国際政治学を学び、卒業後は外務省に入りひとりのモンゴル人としてモンゴルのために尽力したいという具体的な将来像を描いている。こうしたことから、「Kids' AU Camp」の経験は、参加後9年を経たノミンの職業選択に間接的に影響を与えたと共に、「Think global, Act local」という地球市民的意識の形成に大きく影響したものと考えられる。

## ②「認識」への影響

ナツキは、ヨーロッパへの長期滞在旅行で知り合った現地の人々に対して「変な偏見とか、変な先入観がないです<sup>⑭</sup>」と言い切っている。この考え方はどこから生じているのだろうか。

ナツキは、「Kids' AU Camp」で出会った6ヶ国の子どもたちについて、「やはり面白いことはみんな面白いし、人気者は人気者だし、嫌われる子って、みんなから言われているし、そういう感覚みたいなものって共通しているんだなっていうことはすごく思いました。だから全然、変わらないんだなって思いました。<sup>⑮</sup>」、さらに、「1対1になった時に、日本人でも違う国であっても、全然変わらないということは、たぶん Kids' AU Campで強烈に学んだことかなって・・・<sup>⑯</sup>」と語っている。

これは、国連憲章や世界人権宣言<sup>2)</sup>などを持ち出すまでもなく、人間を所属する国や出身民族などの現象面で捉えるのではなく、生まれながらにして自由で、尊厳と権利について平等である絶対的存在として認識する力を得たということではないだろうか。

相互理解とは、単にお互いの「違い」を理解することではなく、お互いに尊重される「同じ人間」であるという認識を持つことである。ナツキは、「Kids' AU Camp」の経験から、他者の存在をどのように認識するのかということを学んだともと考えられる。

リージョナルな枠組で実践される「Kids' AU Camp」は、6つの言語が飛交う非日常の世界である。言語、表現方法、生活習慣など、6ヶ国それぞれの「違い」を挙げれば相当な「違い」が存在するわけだが、ナツキの語りからは、そういった現象的な「違い」に捉われることなく、誰もが

「同じ人間」であるという、人間に対する基本的な認識を学びとったことが読みとれる。ナツキは、参加後 10 年以上経過した今でも、「その感じ方は間違っていない<sup>⑭</sup>」と言い切っているし、いまでも「それが根本にある。<sup>⑭</sup>」と語っている。

このように感じているのはナツキだけではない。例えば、ショウヘイは、「高校で友達が領土問題に関して中国人や韓国人をばかにしていたけど、僕は今連絡取っているわけじゃないけど、親しみがあります。<sup>⑯</sup>」と語り、中国人や韓国人に対する認識を示している。また、ヘリンは「国が違って、言葉が違って、お互いに通じるということを感じました。楽しみや、悲しみも、（感じることは）すべてがみんな同じだと思います。<sup>⑰</sup>」と語り、さらに「日本に対しても特に韓国人たちは昔、日本が韓国を支配した悪い記憶や偏見があっても、このキャンプはそんなことを忘れて、みんなで一緒に未来を創る、新しい歴史を創る（場所だ）と思います。<sup>⑱</sup>」という認識を示している。キスケは、「今の問題、尖閣とかそういうのも、日本人から見た立場もあるし、中国人から見た立場もあるなど。<sup>⑳</sup>」と語り、まわりの風潮に左右されることのない認識を持って混迷している領土問題を俯瞰している。ワカは、「人としてはみんなそんな変わらない。言葉は違いますが、あと他に何が違うかって言われるとわからない<sup>㉑</sup>」と語り、「人として」みな変わらないという認識を示している。

これらの語りに一貫している特徴は、「昔はそう感じたけど、今は違う」というような、当時の一時的な感じ方の変化という形では語られておらず、むしろ、現在の自己認識の到達点として語られているというところにある。

以上、「経験の連続性」とその内実について、①人生の「選択」への影響、②「認識」への影響、という二つの視点から考察を試みた。その結果、次のことが明らかになった。一つは、「Kids' AU Camp」の経験から得た影響は極めて長期間にわたって持続しており、一定程度の「経験の連続性」が確認できたということである。もう一つは、その経験は、今回のインタビューに答えてくれた参加者の人生のベースとなる、ものの見方、考え方

というような基本的な認識に影響を与えているということである。

## 2) リージョナルな視点への影響

次に、北東アジア地域という国境を越えたリージョナルな視点に関わる影響について、影響があるのかないのか。またその特徴とはどのようなものかという疑問に対して、①地域概念の形成への影響、②興味・関心の焦点、③相互理解の内実、という三つの視点から考察していく。

### ①地域概念の形成への影響

ナツキは、「Kids' AU Camp」で感じた各国の「お国柄」について、中国の参加者のエピソードや韓国、ロシアの参加者に対する印象について詳細に語っている<sup>⑫</sup>。また、ラッキーは、「やっぱり似ているところは結構あって……。いろんな国と比較できるのが面白い。すごく面白い<sup>④</sup>」と語っている。

二人の語りからは、参加者への興味・関心が特定の国に捉われていないことが窺える。また、キスケは、「1対1だと、変化っていうのはわからないけど、6ヶ国参加したことで、食事や衣装とか、何にしても、それぞれ違うものが出てきて同時に見られるので、その差というか文化がちょっと違うだけで、すごく違うとか似ているというのが良くわかります。1対1だとどうしても、『それはそれ』って別々で考えてしまうところがあるかもしれません。<sup>⑬</sup>」と語っている。

キスケは、ラッキーと同じように各国参加者の相違が「比較できる<sup>④</sup>」こと、そして、「同時に見られる<sup>⑬</sup>」ことで「良くわかる<sup>⑬</sup>」のだという。

これらの語りからは、「Kids' AU Camp」がお互いの相違を「同時にみられ」、「いろんな国と比較できる」という「面白さ」を持った実践であると理解されていることがわかる。

しかし、「いろんな国と比較でき」たとしても、それが「北東アジア」という地域概念を認識することにはならない。もちろん、参加しているのは北東アジア地域の6ヶ国なので、必然的に北東アジアの言葉や生活文化

に触れることにはなるが、他者理解と地域概念はまったく別次元の問題である。

ショウヘイの「確かにいろんな国の人がいると思いましたが、今言われてみれば確かに6ヶ国で集まっていたかもしれないけど・・・⑩」という語りに象徴されるように、主催者の意図と今回のインタビューに答えてくれた参加者の認識は重なってはいない。ラッキーの「単純にいろんな国の人が来てキャンプするので面白そう」という語りは、ナツキ、ショウヘイ、キスケ、ワカ、ユラなどほとんどの参加者に共通する参加動機である。つまり、参加者はたまたま北東アジア6ヶ国を枠組とする国際キャンプに参加しただけであり、北東アジア地域を強く意識することはなく、その興味・関心はキャンプで出会う「いろんな国」の人たちに向けられているものと考えられる。

しかしながら、「Kids' AU Camp」が地域概念の形成に何も影響を与えていないと考えるのも拙速である。実際に北東アジア各国の人や文化などに触れることでこの地域に対する興味・関心を刺激しながら、地域概念の形成に役立つ具体的な情報（一次情報）を得ているのである。キスケが「・・・尖閣とかそういうのも、日本人から見た立場もあるし、中国人から見た立場もあるなど。⑪」と語っていることもその現れだと捉えることができる。

以上のことから、「北東アジア」というリージョナルな視点については間接的な影響を与えているに過ぎないものと推察できる。

## ②興味・関心の焦点

前述3-(4)-1)-②において、相互理解とは、単に「違い」を理解することではなく、お互いに尊重される「同じ人間」であるという認識を持つことであると述べ、「Kids' AU Camp」がその学びの場となっていることを示した。そこで、次に、なぜ「Kids' AU Camp」がそうした学びの場になり得ているのかという視点からリージョナルな枠組による実践の影響を考察していきたい。

ナツキは、「1対1になった時に、日本人でも違う国であっても、全然変わらない<sup>⑬</sup>」と語り、ショウヘイは「高校で友達が領土問題に関して中国人や韓国人をばかにしていたけど、僕は今連絡取っているわけじゃないけど、親しみがあります。<sup>⑭</sup>」と語っている。つまり、参加者はお互いを同じ人間という本質で理解、認識していることがわかる。こうした語りは8人の参加経験者にほぼ共通したものとして語られている。つまり、「国」があまり意識されず、「個人」が強く意識されていると思われるのだ。なぜ彼らはそうしたトランスナショナルな認識を持ち得たのだろうか。

「Kids' AU Camp」では、日本語、ハングル、中国語、モンゴル語、ロシア語、英語の6つの言語が飛び交い、それぞれの国や民族特有の表現方法や生活習慣など、多くの「違い」が混在するが、それらは、最初は異文化への興味・関心の対象としてお互いに注目し合う。つまり、「めずらしい」のである。例えば、ユラは、「こんな人もいるんだ、あんな人もいるんだということを感じました。多様な国の人たちを見られたことは良かったです。<sup>⑮</sup>」と語っている。

その一方で、キャンプが始まり、一緒に食べて、寝て、遊んで、笑って、泣いて、助けたり、助けられたりというような、人間としての普遍的な行為や感情を時間と共に共有していくと、徐々にそうした「違い」はめずらしいものではなくなり、興味・関心はもっと本質なもの、つまり「個人」に向けられていく。そして、ヘリンが「国が違って、言葉が違って、お互いに通じるということを感じました。楽しみや、悲しみも、(感じることは)すべてがみんな同じだと思いました。<sup>⑯</sup>」と語っているように、お互いの違いを越えて、同じ人間としての出会いに興味・関心が向けられていくのである。この経験は今回の調査協力者8人にほぼ共通するものとして語られているが、ヘリンの語りからは、言語などの「違い」は当然なものとして認識され、むしろ、その興味・関心は「個人」にむけられていることがわかる。こうした、興味・関心の「個人への焦点化」は「多国間」という枠組が影響しているものと推察できる。

ショウヘイの、「確かにいろんな国の人がいると思いましたが、今言われてみれば確かに6ヶ国で集まっていたかもしれないけど、子どもの時は別に何もなかったです。⑭」という語りや、ワカの、「6ヶ国みんな混ざってもそんなに違いがないと思いました。・・・全然違いもないし、違和感もなかったです。⑮」という語りからは、「国」に対する意識がずいぶん薄いことが感じとれる。

「二国間」など相手国が限定されている場合、参加者は構造的に「国」を意識しないわけにはいかない。むしろ、そこに意義を持たせる場合もあるだろう。いずれにせよ、終始その構造は変わらないので、参加者は「国」を意識し続けることになる。

一方で、リージョナルな枠組の場合、相手国が限定されていないので、お互いが「色々な国の人」、あるいは「参加国の一つ」という認識を持つことになる。従って、お互いの意識の中で「国」がクローズアップされることは比較的少なく、それぞれのアイデンティティの一要素として認識はされるがそれ以上のものにはならないと考えられる。その結果、参加者の興味・関心は「個人」に焦点化しやすくなるのではないだろうか。そうした興味・関心に関する概念を図1に示す。

「Kids' AU Camp」の場合、参加者の平均年齢は11.7歳（2012年現在）であり、おもに児童期の子どもたちが参加している。児童が目目の異国の友達に対して、いきなり「国」から理解しようとするとは考えにくい。つまり、最初は「どんな子なのか」という「個人」への興味・関心を抱き、次にその子の背景としての文化や国というものへの興味が湧いてくると考

図1

興味・関心の焦点化に関する概念図		
実践の枠組	リージョナル	国対国
焦点化される対象	個人＞国	個人＜国
具体的なイメージ	A君が所属するB国	B国に所属するA君

※筆者作成

えるのがより自然であろう。従って、リージョナルな枠組による実践の特徴として、「国」に対する意識が拡散され、お互いの興味・関心は「個人」に焦点化されやすいものと考えられる。

以上、ここではリージョナルな枠組による実践の影響とその特徴について、①地域概念形成への影響、②興味・関心の焦点という二つの視点から考察を試みた。その結果、次のことが明らかになった。

一つは、北東アジア各国の人や文化などに触れることでこの地域に対する興味・関心を刺激しながら、リージョナルな視点の形成に役立つ具体的な情報（第一情報）は得ているが、それは間接的な影響に留まっているということである。ただし、それは「Kids' AU Camp」が「遊び」をメインとする実践活動であることが影響しているものと考えられる。地域概念を形成していくためには、地理的、政治的、歴史的、文化的理解などの多様な学習機会が必要であると思われる。いずれにせよ、地域概念の形成に対して「Kids' AU Camp」の影響は小さいということがわかった。

また、リージョナルな枠組による実践の特徴として、「国」に対する意識が拡散され、お互いの興味・関心は「個人」に焦点化されやすいという仮説を示すことができた。

### ③相互理解の内実

相互理解、相互承認はコミュニケーション能力なしに成立しない。では、複数の言語が混在する「Kids' AU Camp」において、参加者はどのようにコミュニケーションを成立させているのであろうか。ここでは、参加者の語りを通してその内実を明らかにするとともに、多言語混在の環境に置かれた参加者の経験が持つ教育的意義を考察していく。

#### a. 非言語による相互理解

「Kids' AU Camp」では、日本語、韓国・朝鮮語、中国語、モンゴル語、ロシア語、英語の6つの言語が混在している。国際キャンプでは英語などの共通言語を設定して実施される場合もあるが、この活動は共通言語が設定されていない。従って、参加者が最初に持つ一般的な不安は意志疎通に

ついてである。

ワカは、「最初、行く前は不安でした。言葉が通じないからどうしようという思いがあって、キャンプ中どうしたらいいだろうと考えていました。通訳の人もいるけど、つきっきりではないので自分で伝えないといけません。④⑩」と言葉に関して不安を語っている。こうした不安を持つのはワカだけではなく、ユラ③②、ラッキー②、ナツキ⑪も同じように言葉に関わる不安や困難を語っている。

一方で、「Kids' AU Camp」で一番印象深い出来事は何かという質問に対して、「最終日に・・・その時に感動し・・・泣いたこと。③⑪」ユラ、「3回通して、すべて最終日が一番の思い出です・・・3回とも全部泣いたと思います③⑤」キスケ、「最終日のさよならパーティーです。あの時、みんな別れを惜しんでいました。泣きそうでした。③⑨」ワカ、「最後の日のお別れの時間に、お互いに涙を流した記憶です。②⑥」ヘリン、「見送りに行って、みんなで大号泣したのを覚えています。⑧」ナツキ、「最後、別れる時に空港で韓国語を叫びながらアリランを歌った気がします。それで大泣きました。①⑤」ショウヘイ、というように、ほぼ全員が最後の別れに際して「泣いた」経験を語っている。つまり、多くの参加者は「泣くほど辛い別れ」や「泣くほどの感動」を経験しているということになる。

一般的に考えて、それほどの経験はそう頻繁にあるものではない。もし、「言葉」がコミュニケーションのもっとも優秀なツールだと考えるならば、これらの参加者の語りをどう解釈したらいいのであろうか。明らかなことは、参加者の間には、涙が湧き出るほどの感動や号泣するほどの惜別の情を感じ合えるまでの相互理解、すなわち「共感」が育まれていたという事実である。

「Kids' AU Camp」はほとんどの参加者がお互いの言語を解さないまま1週間程度の共同生活を過ごしている。従って、参加者は言語とは違う方法を用いて相互理解を図っていると考えられるのである。



## b. 相互理解の方法

「最初、行く前は不安」だったワカは、「言葉が通じないからどうしようという思い」を持ちながらキャンプに参加した。英単語を使うなどしながらなんとか会話を試みたが、「一番できたのはゼスチャー」だと語っている。そして、「向うの子もたぶん一緒に気持ちだったから通じ合って」いると思えたことで、「自分から人と繋がろうとか、コミュニケーションしようとするように」なり、「人と繋がろうとする気持ちが生まれ」て、「一緒に生活できた」と気持ちの変化を語っている④①。

では、なぜ、そのような気持ちの変化が生まれたのであろうか。ワカはそのきっかけは、「おそらく遊びです。遊びから始まっていきました。④③」と言い切っている。さらに、一緒に遊ぶことで、「最初は会話できるかなというような不安がありましたが、みんなで遊んでいるうちに自然に笑顔になっていって、いつの間にか不安もなくなっていきました。そういう時が、一番うれしい時でした。④④」と、当初の「不安」が一緒に遊ぶことで「うれしさ」に変化していった過程を語っている。また、ワカの場合、その遊びとは「サッカー」だったと語っている④②。

ユラは、「最初のことばの問題とか不安」があったが、「実際参加してみても、身振りや手ぶりでコミュニケーションが図れる」経験をしたことで、言語でなくとも心が通じ合えるということに気づいたと語っている③②。ヘリンも、「国が違って、言葉が違って、お互いに通じるということを感じました。楽しみや、悲しみも、（感じることは）すべてがみんな同じだと思いました。④⑦」と言葉以外でも共感を得られたことを語っている。

このように、参加者たちは「言葉」以外でも積極的にコミュニケーションを図り、相互理解に成功している。

言葉が通じない状況の中で相互理解を図ろうとする場合、一般的にはゼスチャーなど身体的な表現を駆使してなんとか意志を伝え合おうとする。「Kids' AU Camp」でも、ほとんどすべての参加者たちは、ゼスチャー、表情（例えば、笑顔やアイコンタクトなど）、片言の言語（おもに英語）、

イラスト、擬音など、言語以外のあらゆる方法を駆使しながら「会話」している。例外的には、数少ない通訳スタッフを探しまわって連れてくるという場合も稀にある。

ワカは外国語がほとんどわからない。しかし妙なことに、「言葉だけでも普通に過ごせていました。④②」と語っている。参加前は、「言葉が通じないからどうしょう④①」と不安を抱えていたにもかかわらず、なぜこのような語りが現れるのであろうか。

おそらく、参加前は、コミュニケーションに「言葉」は不可欠であると思いつ込んでいたのだが、実際に参加してみると、「言葉」にそれほど依存しなくても、その他の手段を駆使することによって「普通に過ごせる」だけの状況が成立していたと考えて間違いないだろう。ユラが、「身振りや手ぶりでコミュニケーションが図れることに気づいたこと④②」や、ノミンが、「いろんな知らない人と、コミュニケーションが取れることを身につけました。④②」と語っていることもそのような背景から現れたものであると考えられる。

ほとんどの参加者の間で、「涙が湧き出るほどの感動」や「号泣するほどの惜別の情」を感じ合えるまでの相互理解、相互承認が育まれていたという事実在即して考えるならば、参加者たちは言葉が使えない分、普段以上に、「しっかり伝えよう」、「しっかり理解しよう」と懸命に努力したものと推察できる。つまり、「言葉」が使えないことが、むしろ、コミュニケーションに対する欲求とそれを満たそうとする熱意を増幅し、お互いに全身全霊で伝えよう、理解しようとする気持ちを高め、その結果、相互理解、相互承認を深化させているものと推察できる。

### c. 参加者が創る主体的な学びの機会

国際理解教育において「相互理解」は学習課題のメインファクターともいえ、それ自体が実践の到達目標として設定されることもある。通常、主催者は相互理解を促進するために意図的・計画的にプログラムを組み立てる。例えば、「Kids' AU Camp」では、アイスブレイクゲーム、各国料理

大会、パフォーマンス大会などがそれにあたるが、「相互理解」を深めることはプログラム全体を通じて常に意識され、追求されていく。

一方で、「相互理解」を図るための学習機会は参加者の主体的・独創的な行為の中にも豊かに存在している。例えば、ナツキは、「Kids' AU Camp」で一番印象深い出来事として次のようなエピソードを語っている。

「やまびこ館（宿舎）で泊まった時に、夜、スタッフは会議があって、その前に消灯時間になります。スタッフはみんな食堂に会議へ行きます。子どもたちはそれ知っていたので、男女で何部屋かにわかれていたけど、抜け出して外で鬼ごっこでもしようという話になりました。外に出るには食堂の前を通るしかなくて、みんなで匍匐前進しました。食堂の窓がガラス張りになっていたでしょ……。でも、下半分が板でした。これなら、匍匐前進すれば行けるみたいな話になって、列になって進んでいきましたが、なにか物音がしたらしくて、ガラス側のスタッフに見つかって、ひどく怒られたのを覚えています。⑨」

このエピソードは、子どもたちがスタッフの目を盗んで宿舎を抜け出して外で遊ぼうとしただけの、どこにでもありそうな話である。しかし、「脱走」を試みた子どもたちはお互いに言葉が通じていない。どのように口裏を合わせたのかという質問に対し、ナツキは、「言い出したのは韓国の子どもだったような気がします。朝鮮学校から参加していた子が日本語と韓国語でやり取りして、韓国、日本がわかれば、あとはゼスチャーとかでロシア、モンゴル、中国へは簡単でした。みんなで『行くぞ！って』（笑）。でも、ひどくおこられました（笑）。スタッフは会議を中断して、みんなが寝るまで見張っていました（笑）。⑩」とその状況を詳しく語っている。

また、ショウヘイは、「（同室の）ロシア人と韓国人が喧嘩しました。じゃれあいがちょっといきすぎて、喧嘩みたいになって、それを僕と中国人の子どもと一緒に止めて……。全然英語はわからなかったですが、「ソーリー」とか知っている単語を使って、一緒に仲直りさせようと思いました。結局お

互い謝って仲直りしました。僕はすごいことだと思いました。⑰」と、喧嘩を必死にとめて仲直りさせたエピソードを語っている。

さらに、ラッキーは、「私が一番仲良くしていた子が、モンゴルの子でゲレルという子でした。・・・ゲレルが体調を崩して、言葉はお互いつたない英語でしたが、ゲレルがキャンプ場で具合悪くなった時に、帰ることになった時一緒に私に来てほしいっていつてくれて、それがすごくうれしかったです。一緒に、夜、何を話したか覚えていないけど。今思ったら、どうやって話していたのかわからないけど、（一緒に）お風呂入ったりとか、湯船につかり二人で歌ったりとかしました。①」と言語を越えて相互理解を深めた経験を語っている。

これらの語られた事実は、主催者が想定していない時間や場所で起こったものであり、意図的・計画的なものではない。つまり、参加者による主体的な相互理解の機会と捉えることができる。ナツキやラッキーやショウヘイらが語るこれらのエピソードを通して、「Kids' AU Camp」には主催者による意図的・計画的な相互理解の学習機会だけでなく、参加者による主体的・創造的な相互理解の機会が存在していることがわかった。

すなわち、主催者の意図と参加者の能動的行為という両面が総合されることで、より豊かな相互理解の学習機会が実現されると考えることができる。その結果として、「涙が湧き出るほどの感動」や「号泣するほどの惜別の情」を感じ合えるまでの相互理解、相互承認、仲間としての「共感」が育まれているのではないだろうか。

以上、ここでは6つの言語が混在する「Kids' AU Camp」において、参加者がどのようにコミュニケーションを成立させているのかという点について、言語、方法、学びの機会という三つの視点から考察を試みた。その結果、次のことが明らかになった。

第一に、複数の言語が混在する多言語キャンプにおいても、言語以外のコミュニケーション方法によって参加者の相互理解、相互承認が充分に実現されおり、仲間（人間）としての「共感」が確実に育まれていることを

示すことができた。

第二に、「相互理解」の学習機会は、主催者による意図的・計画的な場面と参加者による主体的・創造的な場面という両面があり、その両面によってより豊かに実現されることを示すことができた。

### 3) 語りに頻出するテーマ

8人の語りの中に頻出するテーマが二つある。一つは、「別れ」であり、6人が最終日に泣いたことを一番印象深い出来事として語っている。もう一つは、「参加時期」である。

ショウヘイは、「普通じゃあり得ない小さい時に、友達、仲間、そういう存在ができてすごいと思います。⑬」と語っている。また、ナツキは、「いまは、各国に対して知識があるしニュースも見るので情勢とかも今のほうが圧倒的に知っていますが、すごく面白かった体験を2回して、それがあるから、例えば、1対1になった時に、日本人でも違う国であっても、全然変わらないということは、たぶん北東アジアで強烈に学んだことかなって……。⑭」と語り、子ども時代に Kids' AU Camp の経験から学べたことで現在の自分の価値観というようなものを獲得できたと言っている。

ラッキーはもっと直接的な言い方で、「いまだんな年齢の人が参加しているのかわからないですけど、私が参加したみたいに、小学校低学年とか、小さいうちに参加するってのが結構『ミソ』」だと語っている⑦。

「Kids' AU Camp」は、児童（平均年齢 11.7 歳）を対象とした国際理解教育実践であり、多国間キャンプによる体験活動を通じて参加者の相互理解を促進している。その活動の基本的内容は「遊びと生活」であり、歴史学習や理論学習ではない。では、この「Kids' AU Camp」に参加したラッキーやナツキやショウヘイらは参加時期についてなぜ「小さいうち」が良いと明確に語っているのだろうか。

ショウヘイは、「特に歴史も知らないし、世界の言葉も全然わからないから、純粋な気持ちで親しくしようと思えて、そう思えば仲よくなれた・・・

あの時じゃなかったらできなかったのかなって思います。⑳」と述べ、ラッキーは、「大人になるにつれて、色々と偏見とか、それこそ、英語ができてみんなで通じ合えちゃうみたいのあるから、やはり、少し感じ方に差が出てくると思うし、予定調和みたいな感じになる」のではないかと指摘し、「本当に素直な感じ方とか、すなおな行動ができる、小さい時に参加できた」ことに意味を感じているという㉑。

これらの語りからは、大人になるにつれて、近隣諸国へのさまざまな偏見や先入観が作られていってしまう危機感や利害意識が生み出す距離感のようなものへの危惧が感じとれる。ショウヘイもラッキーも「小さいうち」に「Kids' AU Camp」に参加し、その後、社会の中で様々な経験を積みながら10年以上の歳月を過ごしてきた。そうした自分自身の経験をもとに語られる「純粋な気持ち」や「素直な感じ方」というものはやはり「小さいうち」にしか持てない特性だと考えて間違いはないのであろう。

以上、ここでは頻出項目から「Kids' AU Camp」の経験の意味について考察を試みた。その結果、次のことが明らかになった。

第一に、今回のインタビューに答えてくれた参加者は、「別れ」と「参加時期」について強い印象や関心を持っていることがわかった。「別れ」の場面の頻出は、一定の満足感や達成感が得られた活動あればある程度予測できるが、「参加時期」に関する参加当事者からの自覚的な語りは、今後の実践に示唆を与えるものであると考える。

第二に、今回のインタビューに答えてくれた参加者は、「Kids' AU Camp」へ児童期に参加できたことを肯定的に捉えていることがわかった。さらに、それは、人生のベースとなる、ものの見方、考え方というような基本的な認識に影響を与えているという重要な教育的意義に関わるものとして自覚されていることがわかった。

#### 4) 語りであまり関心が示されなかったテーマ

逆に、あまり関心を示されないテーマもあった。それは、「スタッフに

ついて何か印象はありますか」という質問項目である。

例えば、ラッキーは「特にないです。④⑧」と端的に語り、ショウヘイは「覚えている人は朝鮮学校の先生かな……。その人しか覚えていません。①⑨」と語り、スタッフについてほとんど語られていない。さらに、キスケは「通訳とかで頼るくらいで、あとは（スタッフの存在は）あんまり気にしてなかったです。③⑧」と語っている。10年前の出来事や友達の名前は鮮明かつ生き生きと語られる一方で、スタッフについては「特にない」、「覚えていない」、「気にしていない」という語が多い。

一方で、「私の心の中に一番残っているのは、日本のスタッフのみなさん②①」ノミン、「みんな大好きでした。面白くて④⑨。」ナツキ、「当時、各国のスタッフたちが非常に親切に接してくれた⑤⑩」ユラ、「一つの国じゃなくて、アジアの各国（のスタッフ）がここに集まって（一緒に）活動したことの国際的なイメージがわたしには重要なものになっています。②⑨」ヘリン、というような、スタッフに世話になったことへの感謝や一定の評価と読み取れるような語りもある。

いずれにせよ、8 ケースすべてに共通するのは、スタッフへの印象を語った分量が他の質問項目に比べてかなり少ないという事実である。それは、何を意味しているのであろうか。

一つは、スタッフ（大人）にそれほど頼らずとも、子ども同士でコミュニケーションがうまく図られているということが考えられる。つまり、そこには、「子どもの世界が」存在しており、スタッフの入る余地がないように思われる。ナツキが語った「脱走未遂⑨」やショウヘイの「喧嘩仲裁①⑦」のエピソードなどは、子どもたちがあらゆる方法を駆使しながら自分たちで意志疎通を図っていることが示されている。それは、ラッキーやショウヘイが語っている小さい時の「純粋な気持ち」や「素直な感じ方」を共有できる子ども同士という共通性の認識が底辺にあるからではないだろう

つまり、「Kids' AU Camp」においては、ものの見方・考え方、相互理

解、共感の素晴らしさなどをスタッフから学ぶだけではなく、むしろ、子ども同士で学ぶ場となっているのではないだろうか。その結果として、スタッフへの印象が小さいものになったと推察することができる。

#### (5) 考察のまとめ

以上、参加経験者8人の「語り」を分析しながら「Kids' AU Camp」の経験が参加者の人生にどのような影響を与えているのか考察を試みた。ライフストーリー・インタビューという質的調査の方法を用いながら、量的調査では難しい「経験」を契機とする参加者「個人」の変化の過程、すなわち「経験の連続性」および「リージョナルな視点への影響」を考察することで、この実践の持つ教育的意義を明らかにしようとした。その結果、次の観点を示すことができた。

#### 1) 経験の連続性とその内実について

第一に、「Kids' AU Camp」の経験から得た影響は極めて長期間にわたって持続しており、ある経験がその後の人生に影響を与えるという「経験の連続性」を示すことができた。

第二に、その経験は、参加者の生き方のベースとなる、ものの見方、考え方というような基本的な認識に影響を与えているということを示すことができた。

#### 2) リージョナルな視点への影響について

第一に、北東アジア地域を構成する全6ヶ国の人々や文化などに触れることでこの地域に対する興味・関心が刺激されるなど、地域概念の形成に役立つ具体的な情報（一次的情報）は得ているものの、「北東アジア」という地域概念の形成に対する影響は小さく限定的であることがわかった。

第二に、従来の二国間交流など、「国対国」の枠組みによる実践に比べて「国」に対する意識が拡散され、お互いの興味・関心はより「個人」に



焦点化され、個人的関係をより深化させていくのではないかという仮説を示すことができた。

第三に、「相互理解」の内実として、6言語が混在する多言語キャンプにおいても、言語以外のコミュニケーション方法によって参加者の相互理解、相互承認が充分に実現されており、仲間（人間同士）としての「共感」が確実に育まれていることを示すことができた。また、相互理解の学びは、主催者による意図的・計画的な機会だけでなく、参加者による主体的・創造的な機会においても豊かに実現されていることがわかった。従って、その両方の機会を重視することで国際理解教育の実践はより豊かに展開される可能性を示すことができた。

### 3) 参加時期について

参加者は、児童期に参加できたことを肯定的に捉えている。それは、参加者の人生のベースとなる、ものの見方、考え方というような基本的な認識に影響を与えるものとして自覚的に語られており、国際理解教育の方法や課題に一つの示唆を与えているものと考えることができる。

## 4. おわりに

以上の考察のとおり、「Kids' AU Camp」の参加者がこの活動を通じてどのような学びを得たのか、そしてその後の人生にどのような影響を与えたのかという教育的意義を一定程度示すことができた。また、国際理解教育実践の方法や課題についてもいくつか具体的に示すことができた。

国際理解教育とは、平和な国際社会を形成する市民を養成するための教育であり、北東アジア地域の現状に即していえば、北東アジアを構成する6ヶ国の市民が積極的に相互理解を図りながら相互発展的な関係性を構築していける主体形成を図るということである。それはまさに「ESD」がめざす具体的な成果の一つでもある。

従って、こうしたリージョナルな視点を持った国際理解教育の多様な実践が市民セクターによって積極的に実践されていくことが望まれる。本研究がそうした実践の一助となれば幸いである。

なお、本研究で取り上げた「Kids' AU Camp」はもとより国際理解教育実践の一事例に過ぎず、また、その研究方法においても、「ライフストーリー研究は仮説の検証には向いていない調査方法であり、いずれも注目すべき観点を仮説的にとり出すことができたに過ぎない<sup>22</sup>」と野田（2012）が指摘している通り、限定的な事例による仮説的観点以上のものではない。従って、北東アジア地域における国際理解教育実践の充実に寄与するという本研究の目的を追求していくためには、引き続きより多くの事例と調査方法による研究が必要であり、今後の課題としたい。

注

- 1 ESD ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会 <http://www.esd-aichi-nagoya.jp/unesco/outline/index.html>
- 2 国際実施計画は、ESD の 10 年を「すべての教育と学びの場のあらゆる局面に持続可能な開発の指針、価値、実践を組み込んでいくことを大きな目的として掲げ、このような教育と学びが「現在と将来の世代にわたって、環境を保全し、経済が維持され、公正な社会を実現するという、持続可能な未来をつくっていくために行動様式の変化を促すもの」としている。ユネスコアジア文化センター <http://www.unesco-school.jp/esd/desd/>
- 3 将来の世代の経済発展の基盤をそこなわない形で行われる経済開発のこと。1987 年に国連環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）がその報告書のなかで明確にした考え方。
- 4 認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J） <http://www.esd-j.org/j/esd/esd.php>
- 5 特定非営利動法人 こどもたちのアジア連合（名古屋市守山区） <http://www.kids-au.net>
- 6 北東アジア地域を構成する国は、国連アジア太平洋経済社会委員会（UN ESCAP）の枠組みにおいて、日本、大韓民国（韓国）、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、中華人民共和国（中国）、モンゴル国（モンゴル）、ロシア連邦

- (ロシア)」の6ヶ国(以上、国連加盟国)と認識されている。
- 7 例えば、佐藤幸也「平和教育としての日韓交流」『岩手大学文化論叢 6』、2004年。田淵五十夫「小学校における国際交流の重要性と成立条件-大宰府西小学校の日韓姉妹校交流の実践から-」『奈良教育大学教育研究所紀要 27 巻』1991年など。
  - 8 例えば、原幸夫「戦争責任と平和学習の考察-日中韓青少年キャンプにみる歴史認識」『新しい歴史学のために』2007 年度 (1)、民主主義科学者協会京都支部歴史部会編、2008 年、1-10 頁。
  - 9 例えば、日韓においては、歴史教科書問題を発端に、韓国政府が日韓大学生および教師の交流事業中止を公式発表した(2001 年 7 月)。最近の日中では、日本政府の尖閣国有化を発端に国交正常化 40 周年の記念事業や交流イベントの中止と延期が全国 40 道府県以上に広がり 100 件以上の交流事業が中止や延期となった(2012 年 9 月)。
  - 10 例えば、2001 年に中学 1 年生で参加した女子は、Kids' AU Camp が契機となり大学で中国語を専攻し中国へ留学した。また、2002 年に小学 6 年生で参加した女子は、外語大学へ進学しブラジルへ留学した。
  - 11 野田恵『自然体験論 農山村における自然学校の理論』みくに出版、2012 年、173-206 頁。
  - 12 前掲書、野田『自然体験論』、176 頁。
  - 13 やまだようこ「展望 人生を物語ることの意味-なぜライフストーリー研究か?」『教育心理学会年報』日本教育心理学会、2000 年、147 頁。
  - 14 前掲書、野田『自然体験論』、176 頁。
  - 15 2001 年から 2012 年までの延べ参加者数合計 579 人のうち、連続参加者数を除いた実参加者数は 565 人で、そのうち 18 歳以上は 193 名となっている。
  - 16 活動詳細は <http://www.kids-au.net/> で公開されている。
  - 17 韓国語通訳：정찬(チョンチャン、韓国人、公務員)、李太鏞(リテヨン、朝鮮人、学校教員)、モンゴル語通訳：ハス高娃(ハスゴア、中国人、日本語講師)
  - 18 「倫理規定」、「編集方針」は、辻英之、野田恵、須田力「『暮らしの学校だいだらばっち』20 年の実践を事例とした質的研究～地域に根ざした体験学習の教育的意義」平成 20 年度笹川科学研究助成、2008 年を参考にした。
  - 19 前掲書、野田『自然体験論』、182 頁。
  - 20 エリクソン(E.H.Erikson)の発達課題論。8つの人生段階のうち4段階目に規定される児童期(6歳～12歳)の課題として「勤勉性対劣等感」があり、仲間・集団の中で自信を持って生きていくための意志や価値観を育む時期とされ

- る。平山諭・鈴木信夫編『発達心理学の基礎Ⅰ ライフサイクル』ミネルヴァ書房、1995年、72頁。
- 21 「世界人権宣言／第1条／すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利について平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神を持って行動しなければならない」1948年、外務省 HP、「世界人権宣言」仮訳文。[http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/udhr/1b\\_001.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/udhr/1b_001.html)
- 22 前掲書、野田『自然体験論』、205頁。

### 参考文献

- 安準模「地球市民としての平和教育を一国際理解の視点から」『平和教育研究年報』(25)、広島平和教育研究所、1997年
- 宇野重昭「北東アジア地域と新しい地域連関を目指して」『21世紀の北東アジアと世界』国際書院、2001年
- ト部匡司「ESDは平和教育にどう位置づけるのか」『徳山大学論叢』(68)、徳山大学、2009年
- 特定非営利活動法人こどもたちのアジア連合『Kids' AU BOOK Vol.1』、2011年
- 笹川孝一「東北アジアにおける多文化教育の現状と『東北アジア学習権共同体』の創造」『日本の社会教育第39集』、東洋館出版社、1995年
- 佐藤郡衛『国際理解教育－多文化共生の学校づくり－』明石書店、2001年
- 多賀秀敏「Ⅰ 北東アジアの国際関係」『北東アジア事典』国際書院、2006年
- 田淵五十夫「小学校における国際交流の重要性和成立条件-大宰府西小学校の日韓姉妹校交流の実践から-」『奈良教育大学教育研究所紀要 27 巻』1991年
- 中島智子『多文化教育－多様性のための教育学－』明石書店、1998年
- 野田 恵『自然体験論 農山村における自然学校の理論』みくに出版、2012年
- 畑田重夫「北東アジアに平和を」『学習の友』684、2010 理論Ⅱ』東洋館出版社、2004年
- 原 幸夫「戦争責任と平和学習の考察－日中韓青少年キャンプにみる歴史認識」『新しい歴史学のために』2007年度(1)、民主主義科学者協会京都支部歴史部会編、2008年
- 平山諭・鈴木信夫編『発達心理学の基礎Ⅰ ライフサイクル』ミネルヴァ書房、1995年
- 広島平和教育研究所編『平和教育実践事典』労働旬報社、1981年
- 藤井敏彦「Ⅵ 平和と教育」(財)広島平和文化センター『新訂平和事典』勁草書房、1991年

北東アジア地域における国際理解教育実践

藤田秀雄「21 世紀の平和・人権学習」日本社会教育学会『現代的人権と社会教育  
の価値（講座 現代社会教育の理論Ⅱ）』東洋館出版社、2004 年

増田祐司編『21 世紀の北東アジアと世界』国際書院、2001 年

松井ケティ「GPPAC 国際提言の意義—平和教育を中心として—」『法と民主主義』  
No.401、日本民主法律家協会、2005 年

やまだようこ「展望 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か？」

『教育心理学会年報』日本教育心理学会、2000 年

ヨハン・ガルトゥング『平和を創る発想術』岩波書店、2003 年